

# 他科で積極的に治療されなかった

日本医科大学 東洋医学科  
たかみざわ医院 漢方外来

古賀実芳先生



## はじめに

漢方専門外来で「痛み」は多い訴えの一つである。西洋医学的には異常所見がない、あるいは治療対象にならない「痛み」でも、東洋医学の診断・治療が有効なことがある。東洋医学では痛みを、①「通じざれば則ち痛み、通じれば則ち痛まず」：気血水が滞りうまく流れないと痛みが生ずる、②「榮(滋養)されざれば即ち痛む」：気血や陰精が不足し榮養できなければ痛みが生じる、③「諸痛属心」：ストレスや心の影響で痛みを感じる、と捉えるが、多くの場合これらは複合してみられることが多い。今回、他科では積極的に治療されなかった「痛み」に対し、漢方治療が有効であった症例を呈示する。

### 症例 1 53歳、女性、便秘を伴う腰痛・下肢痛・両側側腹部痛

主訴は、腰痛、下肢痛、両側側腹部痛、便秘。若い頃からの便秘が閉経(49歳)前より悪化し、下剤を服用していたが、来院5ヵ月前の2月から便秘解消のためにヨーグルトを毎日500g摂取している。4月の起床時に、数年前の打撲部位が伸びないような違和感があり、その数日後からは、立位で足が震える、座位で腰部より下の脱力感を感じるなどの症状が出現。さらに来院2ヵ月前からは、両側側腹部をつかまれるような痛みや、少し動いただけで腰部の腫脹と熱感出現、足がつる、尾骨周囲の違和感、頭痛、夜間のこむら返りとこれに伴う不眠など、症状が多彩になった。整形外科では異常なく、婦人科では更年期障害のためといわれるも未治療。

初診時所見は、痩せて小柄な体格で色白、顔が上気し白髪が目立つ。東洋医学的所見を図1に示す。

腰痛などの主訴がヨーグルトの大量摂取以降増悪していることと、血虚の所見から、ヨーグルトの摂取量を極力制限し、当帰四逆加呉茱萸生薑湯を処方。その結果、1週後には痛みが軽快、食事を美味しくと感じ、便通も改善。ヨーグルトの摂取量は50g。不眠に酸棗仁湯を追加処方。3週後には、体調がよく毎日快便、快眠、家事ができるようになり、その後、他の症状も順次軽快し、4ヵ月後に治療終了となった(図1)。

本症例は、元来虚弱であったところに、ヨーグルトの継続的な過剰摂取により湿と寒が入り、脾胃が冷やされ気血が巡らず、多様な症状が出現したと考

#### 初診時所見

舌：歯痕あり、淡紅舌、中央に黄色薄苔、少苔。

脈：細・左尺弱

腹：季肋部に細絡多数あり。

(52歳・薬疹後より自覚あり)。

腹部全体が硬い。

心下痞鞭、小腹

不仁、瘀血圧痛

両側、両側鼠径

部圧痛



当帰四逆加  
呉茱萸生薑湯  
酸棗仁湯

1日量分3食間

|                   | 1包 1日1回眠前                 | 不眠時のみ                                    |
|-------------------|---------------------------|--|
| 腰痛<br>下肢痛<br>側腹部痛 | 痛みが楽になった。                 | 調子がよい。<br>家事ができるようになった。<br>側腹部痛は疲労時のみ出現。 |
| 便秘                | よくなった。下剤使用せず。<br>ヨーグルト減量。 | 快便。<br>ヨーグルト中止。                          |
| その他の<br>自覚症状      | 食事が美味しく感じる。<br>不眠。        | 茶道再開。<br>不眠時は酸棗仁湯で有効。                    |
|                   | 脈：細 舌：黄白苔<br>腹：硬さ↓、両鼠径部圧痛 | 脈：細 舌：黄白苔<br>腹：心下痞鞭、右鼠径部圧痛               |
|                   | 7/2 7/9<br>1週             | 7/23<br>3週                               |

図1 症例1の東洋医学的所見と経過

1988年 東京慈恵会医科大学医学部卒業  
 1990年 同大学形成外科学教室  
 1991年 漢方専門診療所誠心堂  
 1995年 神奈川県リハビリテーション病院東洋医学科  
 1997年～たかみざわ医院(横浜)漢方外来  
 2002年～日本医科大学東洋医学科

# 「痛み」の漢方治療

えられた。当帰四逆加呉茱萸生姜湯が久寒をとり気血を調和し良好な経過をみた。

## 症例2 53歳、女性、四肢のしびれ、五十肩、めまい

主訴は両手足のしびれ、左肩関節痛。10年前より自転車に乗ると手がしびれ、強く振ると消失。3年前より睡眠中に手のしびれる痛みで不眠となり、整形外科でビタミンB<sub>12</sub>の投与を受けるも効果なし。また、半年前からは左肩関節痛が発症し、五十肩との診断を受けたが未治療。

初診時所見は、やや小太りで、色白、「健康のため」水分を多くとっており、多汗である。しびれは、起床時に強い放散痛で、動かしていると消失する。手のしびれは冬に悪化、足のしびれは春から夏に悪化する。日昼、よく物を落とす。東洋医学的所見を図2に示す。

しびれの状態や舌所見から痰飲が考えられ、これをとるため飲水の減量を指示し、二朮湯に疎経活血湯を合方した。1週間後右手のしびれは軽減し、食欲良好となったが、服用後に胃部不快感があるため疎経活血湯を中止し、加味逍遙散に変方。2週間後には朝の手足のしびれはほぼ消失、手足の冷えも改善。しかし、肩関節痛は服用量を増しても改善がみられなかった。肩こりがある点に注目し、葛根加朮附湯に変方したところ、その2週間後には軽快、夜間の痛みも消失した。ところがめまいと耳閉塞感が出現したため二陳湯を併用し症状は消失。その後、再発なく漢方薬漸減にて治療を中止した(図4)。

痰飲の元である脾を治すことも考え二陳湯加減方

である二朮湯を処方した。その後、葛根加朮附湯に変方し、めまいなどの痰飲症状が出現したことから、本治の重要性を痛感した。また、加味逍遙散の合方は「気巡ればすなわち湿巡る」理気作用が強められ有用であったと思われる。

## まとめ

「痛み」を、体の中を気血水がきちんと巡っているか、滞りや不足がないか、心が落ち着きリラックスできているか、という東洋医学的な視点から診ることで、病態把握の幅が広がり、漢方薬をより有効に使うことができると思われる。

## ディスカッション Discussion

**後山** 整形外科や産婦人科の医師が診察しても、その痛みに対しては、とくに有効な治療が行われなかったにもかかわらず、漢方薬で改善することが出来たという大変示唆に富んだ症例を呈示していただきました。

ところで、症例2で五十肩に二朮湯が使われていましたが、期待された程の効果が得られていませんでした。二朮湯が効く五十肩のタイプというものはあるのでしょうか。

**古賀** 二朮湯はもともと臂痛に対して使用する処方であるとの記載があります。つまり肩の痛みでも上腕痛を主にするような場合には有効でしょうが、本症例の場合は、後頸部からの痛みが中心であったため、それほど効果が認められなかった可能性があります。

**後山** 単に五十肩と言っても、もっと詳しく痛む部位をお聞きする必要もあると言うことですね。

### 初診時所見

脈：細  
 舌：淡白舌、歯痕、舌下静脈1/2  
 腹：軽度胸脇苦満、小腹冷感、小腹不仁、右臍傍部圧痛、右小腹急結。

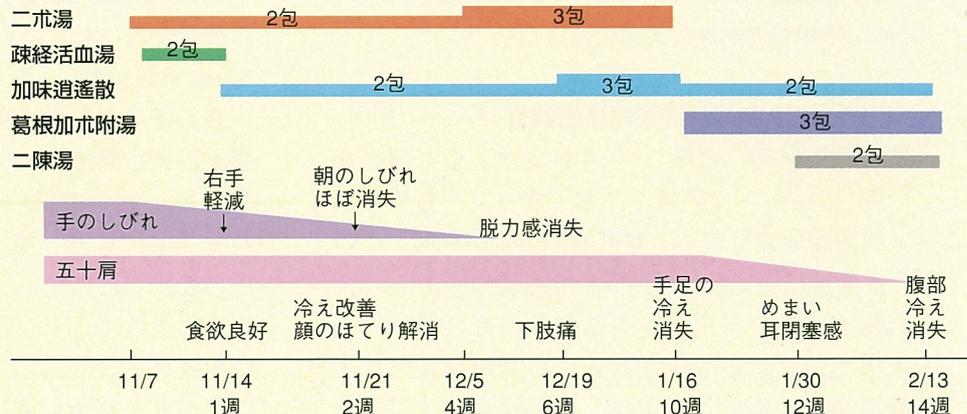


図2 症例2の東洋医学的所見と経過